

山目校舎 わかば学級・中学部グループ

1 研究主題

集団学習における、人やものとの関わりを促す授業づくり
～わかば・中学部合同の集団学習をとおして～

2 研究テーマ設定の理由

本研究グループの児童生徒が、人やものとの関わりをとおして、主体的な姿を引き出したり、新しいものやことへの興味関心を広げたりし、学びが日々の生活へとつながっていくことで、豊かな学びを目指したいと考えた。

本グループの児童生徒は、重度重複学級に所属しており、半数以上が車椅子を使用している。また、小学部1年生から中学部3年生と、年齢が幅広く、発達段階や実態も様々である。生活全般にわたり支援を要する児童生徒が多く、自己表現の方法も多様である。進んで人やものに関わることが難しい児童生徒も多いため、人やものに関わる場面を設定し、職員を介して関わりを広げていくことが重要だと考える。また、本グループの中学部生徒は3名しかおらず、集団学習の充実が課題である。来年度は高等部に進学するため、多様な人との関わりをもてる集団学習の場の設定が重要であると考えた。人やものに関わるということは、経験や考えや興味を広げ、「やってみよう！」と主体的な姿につながり、満足感や達成感を得ることができる。それが安定した気持ちで豊かな日常生活を送ることにつながっていくと考え、研究テーマを設定した。

3 推進計画

1年次目の研究推進計画について示す。

月 日	研究活動	内 容
4月21日	第1回全校研究会	
5月16日	にこにこタイム㊦1	交流ボウリング大会(T1三浦)
5月17日	グループ研究会①	研究の進め方について検討・確認
6月22日	グループ研究会②	児童生徒実態共有、集団学習チェックシート提案
6月27日	にこにこタイム㊦2	「みんなでポッチャ！」ボックスめがけて投球(T1小野寺育)
7月21日	にこにこタイム㊦3	「みんなでポッチャ！」ボックスめがけて投球(T1森)
7月21日	グループ研究会③	集団学習チェックシートの内容検討
8月30日	にこにこタイム㊦4	「みんなでポッチャ！」ボックスめがけて投球(T1江戸)
9月5日	グループ研究会④	研究授業に向けて
9月13日	にこにこタイム㊦5 研究授業①	「みんなでポッチャ！」ボックスめがけて投球(T1江戸)
9月15日	授業研究会①	研究協議「実態の様々な児童生徒でも楽しめるポッチャの新ルール」
11月1日	グループ研究会⑤	ポッチャ新ルール検討
11月8日	にこにこタイム㊦6	「みんなでポッチャ！」ジャックボールめがけて投球(T1佐々木洋)
11月17日	研究日	iPad 事例研究会
11月22日	にこにこタイム㊦7	「みんなでポッチャ！」ジャックボールめがけて投球(T1柏山)
12月6日	にこにこタイム㊦8 研究授業②	「みんなでポッチャ！」ジャックボールめがけて投球(T1久慈)

12月20日	授業研究会②(あすなると合同)	研究協議「集団学習の中で、人と関わりをもてるゲームのアイデアと、関わりを促す場の設定」
1月23日	グループ研究会⑥	グループ研究のまとめ
2月7日	にこにこタイム③9	「みんなでポッチャ！」ジャックボールめがけて投球(T1及川聖)
2月14日	第2回全校研究会	グループ研究の発表、全校研究のまとめ

4 授業（研究）実践

(1) 本グループにおける、「一人一人の豊かな学び」の捉え

5月の研究日で、本グループの児童生徒における「豊かな学び」とは何かを話し合った。感情表現を明確な方法で表現することが困難な児童生徒においても、微細な表情の変化や手足の動き、視線などの表出を大切にしていきたいと考えた。

- ・「やりたい！」と思う。興味を示す。顔を向ける。
- ・教材教具に関わろうとする。触ろうとする。やってみる。
- ・仲間や教師の様子を見る。まねる。何らかの反応を示す。
- ・気持ちを伝えようとする。表現する（快不快を表情や身体の動きで表現する）。
- ・質問する。
- ・自分なりにやり方を工夫する。
- ・学んだことを、他の場面で（様々な学校生活の場面、家庭、個別学習、学級活動での取り組みを集団学習で）やろうとする。

(2) 1年次目の取り組み内容について

昨年度研究の成果として、学習活動の繰り返しと積み重ねにより活動を楽しむ姿がみられたことや、生徒の実態を教師間で共有したことで、同じ指導観をもって指導できたことが挙げられた。一方課題として、関わりに広がりを持たせる工夫や、少人数の中で相手と関わりをもてる場の設定の必要性が挙げられた。このことから、以下の内容で取り組んだ。

- ・月1回、わかば・中学部合同の集団学習を行う。
- ・中学部が2年間継続して取り組んできた「ポッチャ」を題材とする。
- ・実態把握を行い、個別の目標、ねらいを整理し、教師間の共通理解を図る。

(3) 集団学習チェックシートの活用について

継続して取り組む集団学習において、手だてに対する児童生徒の様子を記録していくことで、支援方法を検討する手掛かりとしたり、児童生徒の様子や変容を見取ったりするためのチェックシートを作成した。活用例と活用結果を右図に示す。

わかば学級・中学部 集団学習チェックシート			
		小学部 1年 わかば1組 氏名 Bさん	
題材名「にこにこタイム みんなでポッチャ！」 集団学習のねらい(目標): 集団学習で、楽しい雰囲気を感じて、教師や友達と関わりながら、様々な経験を積み重ねる。		評価:◎一人できる ○支援を受けてできる △していない ?判断できない /評価できない 6月 27日(第2期) 8月 30日(第4期)	
項目	本時の目標:一人でボールを投げようとするができる。	本時の目標: (のから) 1m程度の距離から、句配(三島マッド)を使ってボールを投げることができる。	
	評価	評価	手立て/活動の様子
① 活動場所では落ちない、リラックスしている。	○	○	
② 仲間を意図する様子が見られる。	◎	◎	仲間の様子を伝える一注視していた。 仲間を注視できた。
③ 今日やることの説明を聞いている。説明する教師に顔を向けている。	○	○	一歩中継が切れて動き出すが、言葉掛けで促して話を聞いた。
④ 場の楽しい雰囲気を感している。	○	◎	一仲間が的にボールを入れると、笑顔で拍手して喜んでた。
⑤ やることが分かり、期待感を持っている。	○	○	
⑥ 困ったときに、教師に伝えるための自分なりの方法が分かっている。	△	○	「ふっん」と言ったり、指さして教師に伝えようとしていた。
⑦ 仲間や教師の活動を見たり、話を聞いたりしている。	○	○	
⑧ 仲間の様子や教師の手本を見て、同じように取り組もうとしている。	◎	◎	手本を示す 一教師の手本をまねて一人でボールを投げることができた。
⑨ 仲間や教師と簡単なやりとりをしようとしている。	○	◎	リーダーに指名されると返事をした。じゃんけんカードを渡わなくてもじゃんけんができた。
⑩ 分からないことなどについて質問している。	△	△	
⑪ 仲間や教師との関わりを楽しんだり働きかけを受け入れたらしている。	◎	◎	一仲間がゴールを決めると、笑顔で拍手していた。
⑫ 教材教具に意図して関わろうとする(顔を向ける、支援を受け入れる)。	◎	◎	仲間が言葉でサポートを受ける。 一自分でボールを投げる、教師の「どうせ」を聞いてボールを投げることができた。
⑬ 活動に、自分なりの方法で関わろうとしている。	○	○	
⑭ できないこと、苦手なことにも諦めずに取り組もうとしている。	○	○	
⑮ 楽しい、悔しい、もう一回やりたいなど、感じたことを、伝えよう(表現しよう)としている。	◎	◎	一ゴールに入らなかつたら、「んん・・・」と指さしたり、悔しそうな表情がみられた。
⑯ これからの学習に期待している様子が見られる。	?	?	的にボールを入れると、笑顔を見せ、自ら拍手して喜んでた。
働きかけやかかわり方、手立ての改善点等			

【図:わかば・中学部集団学習チェックシート様式及び記入例】

～まとめ～

- 回数を重ねることで、「◎」が増え、児童が学習に見通しをもち、楽しみながら取り組んでいくことが見取れた。
- 手だてに対する児童の活動の様子が分かり、働きかけの工夫につながった。
- 実態によっては、評価が「？」になる項目が多い児童生徒もおり、実態のさまざまな児童生徒にも対応する項目の検討が必要である。
- チェックシートを複数で見合い、活動の様子を共有したり、多角的な視点から手だてについて深めたりできると良かった。

(4) 合同集団学習「にこにこタイム」の実施

本グループでは、わかば学級と中学部合同の集団学習「にこにこタイム（みんなでポッチャ!）」を月1回計画し、授業実践をした。わかば学級はポッチャ初体験の児童が多い。そこで、継続してポッチャに取り組んできた中学部生徒が充足感をもて、かつ初体験の児童でも分かりやすいルールを検討し、実践した。全9回実施した「にこにこタイム」のうち、9月実施の第5回と12月実施の第7回で研究授業、授業研究会をした。以下に概要を示す。

～進め方～

- ☆6～9月は、「的（ボックス）めがけて投球し、勝敗を競う」ゲームとする。
- ☆11月～2月は、「ジャックボールを狙って投球し、距離で勝敗を競う」ゲームとする。

研究授業、および授業研究会①

研究授業 9月13日(火) 10:40～11:20 授業者:江戸利之他

☆ゲームのルールや支援のポイント

- ・的にアニメキャラクターのイラストを貼り、目立たせる。
- ・1, 3, 5mの投球ラインを目安とし、投球場所を選択できるようにする。
- ・的を、一直線ではなくランダムに配置し、的までの距離を自分で判断できるようにする。
- ・得点は、チーム毎に色分けした花を貼って表示する。



授業研究会 9月15日(木)

協議の柱「年齢や実態の様々な児童生徒でも楽しめるポッチャのオリジナルルールのアイデア」

☆出されたアイデア

- ・色分けされた同心円のシートを使い、点数を視覚的に分かりやすくする。
- ・ところどころにチャンスゴールを置き、入れればサービスポイントゲット。
- ・衝立(ストッパー)を置き、ボールが遠くに行きすぎないようにする。衝立に当ててはね返ってもオッケー。
- ・ルールを変える前に、ジャックボールに当たる練習をする。
- ・個人戦から始め、距離感を知る経験を積む。
- ・ジャックボールを目立たせる。
- ・的に当たったら、キャラクターが出てきたり、音や鈴が鳴ったりする仕掛けをする。
- ・二人で得点を競い、チームでポイントを貯めていくルールにする。
- ・的を上から見られるように、ステージ上から投球する。



☆金濱副校長から

ポッチャや様々なスポーツにおいて、決められたルールにこだわらず、柔軟性をもたせ、楽しくやることをねらいとしてほしい。的に近づけるのは高度である。それをいかに児童生徒が理解し、楽しくできるかは、今回の研究会で出たアイデアがとても参考になると思う。

異年齢の仲間の交流については、今年度の山目の独自性である。今ある集団でいかに楽しく交流できるか、今回の取り組みの成果である。例えば、なのはな学級も一緒に、あすなろ分教室とオンラインで、交流籍校交流で小学校の児童と、のように交流がさらに広がっていき、発展性と継続性をもちながら高め合えると良い。

研究授業および授業研究会②

研究授業 12月6日(火) 10:40~11:20 授業者:久慈美香他

☆ゲームのルールや支援のポイント(9月の授業研究会で出されたアイデアを参考にし、以下の手だてを考えた。)

- ・投球回数を増やすため、交互ではなく同時投球とする。⇒先攻後攻は決めず、使用するボールの色を選択する。
- ・正方形のエリアシートを使用し、鮮明な配色、点数の表示で視覚的に支援する。
- ・ジャックボールに当てたら5点、エリア内は3点、2点、1点の色分けをする。
- ・ジャックボールを意識できるよう、キャラクターのイラストや鈴を付ける。
- ・待機エリアを向かい合うように配置し、互いに応援の様子がみえるようにする。
- ・待機エリアと投球場所を分けることで、より活動への意識付けを行う。
- ・ジャックボールに当たったら、大きな鈴を鳴らし称賛する。
- ・ホイッスルで対戦が始まる合図をすることで、場面の切り替えを図る。



授業研究会(あすなる分教室と合同で実施) 12月20日(火)

協議の柱「集団学習の中で、人と関わりをもてるゲームのアイデアと、関わりを促す場の設定」

☆出されたアイデア、場の設定

- A・玉落とし、合奏、風船バレー、キンボール⇒道具の受け渡し、役割の明確化。学級ごと、誕生日ごとのグループ分けを工夫する。
- B・カードゲーム(ババ抜き)⇒もののやり取り(感染症対策が必要)
- ・鈴ひも、バルーン遊び、風船バレー、大玉ころがし、卓球バレー、風船運び
- C・だるまさんがころんだ⇒音楽やかけ声に合わせてフラフープ(エリア)に移動する(ペアで行動)。フラフープにお題を用意する。
- ・グリコ、すごろく、フルーツバスケット
- D・空気圧や風などを利用し、ボールを上げる(玉入れなど)⇒ゴムを引っ張って飛ばす、空気入れを2人以上で動かす
- ・ものの受け渡しができるゲーム⇒距離が近くなる、見やすく(注目しやすく)なる。感染症対策として、シートや筒を活用する。
 - ・的倒し⇒大きな的をみんながタイミングを合わせて倒す。



☆金濱副校長から

常に言語化によるフィードバックが意識されており、日々の授業の積み重ねが人やもの意識できる土台になっていた。題材として取り上げたポッチャは、力の差があっても対等に競うことができ、人と関わり合えることができる代表的なスポーツである。実態に応じてルールを作る楽しさを感じた。学習をツールと捉え、最後に大逆転できるなど、面白いルールがあっても良い。また、教師も一緒にやることで、児童生徒のさらなる関心を引き出すことにつながるのではないかと。

特別支援学校は、手厚い支援や関わりができる反面、児童生徒同士の相性が合わない場合でも、ずっと一緒にいなければならない。その中で、人との関わりをどこを明確にしていくのかを考えながら取り組んでほしい。

～まとめ～

全9回の「にこにこタイム」を実施することができた。チームで協力して優勝を目指したり、仲間を応援したり、点数を決めるとハイタッチをして喜びを共有したりし、仲間を意識し、関わる場面を設定した。繰り返すことで、にこにこタイム以外の学校生活の様々な場面で、児童生徒同士の交流があった。また、にこにこタイムの中でも、見通しをもち主体的に取り組もうする姿がみられた。中学部については、チームリーダーという役割を担ってもらうことで、意欲的に学習に向かう姿がみられた。児童生徒の変容・様子は以下の通りである。

	変容・様子
児童生徒同士の関わりについて	<ul style="list-style-type: none"> ・中学部3年 Aさんは、リーダーをやることでわかば学級児童の名前を覚え、にこにこタイムが始まる前にiPadを活用してわかば児童と積極的にコミュニケーションを取っていた。 ・小学部1年 Bさんは、登校すると中学部の教室に寄り、生徒一人一人に挨拶をするようになった。

<p>集団学習を継続実施する中で</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学部2年 Cさんは、廊下で中学部3年 Kさんとすれ違おうと声をかけるようになった。 ・中学部3年 Aさんは、大好きなポッチャを集団で継続して取り組めることに期待感をもち、にこにこタイムをする前の日から楽しみにしていた。 ・中学部3年 Dさんは、リーダーをやることで、進んで返事をしようしたり、手を上げようしたりし、意欲的に取り組むようになった。 ・小学部1年 Eさんは、チームメンバーが誰になるのか、期待感をもちようになり、チーム分けのくじ引きのときに、近くに見に行くことがあった。 ・小学部3年 Fさんは、ハイタッチで喜びを共有することを継続すると、進んで手を伸ばすようになった。
----------------------	---

(5) 学部研修会

「言葉を介さないコミュニケーションの方法について」

講師：総合教育センター 教育支援相談担当 研修指導主事 阿部真弓氏

なのはなグループと合同で実施した。中でも、本グループの児童生徒の実態から、「障がいの重い子どもの、富田分類によるコミュニケーション段階別の支援方法のポイント）」についての内容を以下に示す。

- ・生活経験と子どもの興味関心の高いことを組み合わせると良い。
- ・聞き手効果段階では、反応がみられたら「伝わったよ」「受け止めたよ」と言語化していく。
- ・意図的伝達段階では、興味関心のあるものの中から、2択にして選択できるようにし、モデルを示す。
- ・命題伝達段階では、実際に触れたり食べたりしたことのあるものの中から、選択肢を家庭と連携して決め、視線や指差し、言語でのコミュニケーションを促す。

5 実践のまとめ

(1) 成果と課題

- 本グループにおける「豊かな学び」の捉えについて、グループ内で共通理解を図り、そのめざす姿を意識して指導・支援に取り組むことができた。
- 年度初めに児童生徒の実態共有を行い、関わり方や目標について職員同士で共有しながら集団学習に臨むことができた。
- チェックシートの活用を通して、継続実施した「にこにこタイム」における、児童生徒の活動の様子や変容を見取ることができた。
- わかば学級・中学部合同の集団学習「にこにこタイム」に1年間継続して取り組むことができ、異年齢の仲間との深い交流を実現することができた。
- 授業実践をとおして、実態の様々な児童生徒でも取り組みやすいポッチャのルールや、人を意識できる手だてや働きかけについて検討し、実践することができた。
- 研究授業を2回行うことにより、「1回目の反省や、研究会で出たアイデアを受けて、手だての検証と改善」⇒「2回目で実践」⇒「実践してみてどうだったか」、を繰り返し、授業改善

につなげていくことができた。また、2回とも参観した先生から、1，2回目を比較した視点で、児童生徒の変容や授業展開についての感想や意見をいただくことができた。

- グループ研究のテーマや児童生徒の実態、取り上げた題材に共通点や類似点多くがあったため、あすなる分教室と合同で授業研究会を実施した。互い知ることや、アイデアを共有することにつながった。
- 現段階では、教師を介して人と関わるものがほとんどだが、児童生徒同士の関わりについての支援方法のあり方を探り、主体的な姿を引き出す。
- 集団学習を実施する上で、教師間の役割分担を明確にする。
- 1年次目研究のテーマとして設定した本題材を他学団や他分教室との交流にもつなげていけると良い。
- 次年度は中学部が卒業し、わかば学級のみとなる。2年次目の研究として、今年度の実践を生かしながら、さらなる人との関わりを深める題材設定を検討する必要がある。

(2) まとめ

1年間継続して「にこにこタイム[㊦]」に取り組み、全9回実施することができた。ポッチャ経験者も初心者も、みんなが楽しく、達成感をもて、また、将来ポッチャに触れる機会が多分にあることを踏まえ、正規のルールに少しでも近いように(ポッチャ用のボールを使う、先攻は赤、後攻は青など)、ということを大切にしながらルール作りをした。的めがけて投球するルールから、ジャックボールめがけて投球するルールに切り替えるときは、エリアシートの形や、得点の付け方、応援する場所などについて繰り返し話し合いを重ねた。研究会の副校長からの話にもあったが、柔軟で大胆なルールにすることで、「勝てるかも!」「もっとやりたい!」と主体的な姿を引き出し、その姿が豊かな生活にもつながっていくのだと感じた。

また、人との関わりについては、「応援する」、「仲間が取り組む姿を見る」、「喜びを共有する」ための支援方法についても検討、実践を繰り返した。少しずつではあるが、仲間を意識する姿がみられるようになった。引き続き、仲間と進んで関わろうとする姿を引き出せるような支援の方法を探っていきたい。

わかば学級が12月に実施したクリスマス演奏会『どれみコンサート』では、中学部を招待し、一緒にコンサートを楽しむことができた。中学部生徒が手品を披露してくれる場面もあり、にこにこタイムでの交流をさらに広げることができた。学校生活の様々な場面でも、わかば学級と中学部同士の交流があり、自然と互いを意識できていた。一部の学習活動にとどまらず、交流を様々な場面に広げていくことが「一人一人の豊かな学び」につながっていくのではないか。